

諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ

キリスト教文化センター准教授 森田 喜基

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

(ルカによる福音書 15 章 1-7 節)

本日の奨励タイトルでもあるこの言葉は、今出川校地新町キャンパスの門をくぐると目に入るものです。これは、1885年の同志社英学校創立10周年記念式典で、新島襄が式辞の中で述べた言葉とされています。

本日の出張チャペル・アワーには、アメリカのバークリー音楽大学で学ぶ学生が演奏のために駆けつけてくれています。彼は2024年10月に学校法人同志社が企画する「新島襄のラットランド・アピール150周年記念ツアー」に同行し、バーモント州ラットランド市のグレイス会衆派教会での記念礼拝で演奏する予定です。小学校から同志社で学んできた彼にとって、この言葉は何度も耳にしたものでしょう。私自身は、約30年前に大学から同志社で学び始めました。その頃はあまりこの言葉は同志社で強調されていなかったように思います。しかし新島の信仰とその行動を端的に表している大切な言葉です。この言葉が皆さんの心に深く刻まれることを願っています。

新島襄のラットランド・アピール

新島襄にはいくつかの有名なエピソードや言葉があります。今日の「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」もその一つですが、今年150周年を迎える「ラットランド・アピール」も同志社の歴史において重要な出来事です。

1874年10月9日、約10年に及ぶ留学を終え、帰国を目前に控えていた新島襄は、グレイス会衆派教会で開かれていたアメリカン・ボード第65回年次大会に出席しました。彼は告別の演説に代えて、日本にキリスト教の学校を設立する必要性を熱烈に訴え、その場で約五千ドルの寄付を約束されました。この出来事こそが、同志社の誕生を具体的に約

束した瞬間だったのです。

同志社英学校創立 10 周年記念式典

新島襄は帰国後、大阪で学校設立に奔走しましたが、「神の見えざる御手」に導かれる形で、同志社は 1875 年に京都で同志社英学校として産声を上げました。それから 10 年後の 1885 年 12 月 18 日、同志社創立 10 周年記念式典で、新島は「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」と語りました。

彼はこの式典で、渡米中に退学になった数名の学生のことに触れ、「ほんとうに彼らのためには涙を流さずにはいられない。彼らは真の道を聞き真の学問をしていた人であったが、ついに退学させられることになった。諸君よ、人ひとりは大切である。ひとりは大切である。過去はすでに過ぎたことなのでどうしようもない。しかし、今後については私たちはまことに用心深くありたい」と涙ながらに語りました（学校法人 同志社「現代語で読む新島襄」編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2001 年 183-184 頁）。

しかし、この場は記念式典です。新島は来賓を前に、校内の不祥事を隠すことなく語り、生徒一人ひとりの大切さを強調しました。そのスピーチは聴衆に強い印象を与え、「会場全体で袖を濡らさなかった者はいなかった」と言われるほどでした。一方で、「こんな時にそんなことを言わなくても」「空気が読めない」と思った人もいたかもしれません。しかし、新島はそうした視線を気にすることなく、「見失った」一人に涙し、まなざしを向けた教育者であり、牧師であったのです。同志社は、そんな新島襄のまなざしを学生に向けたことを原点としています。私たちはこの原点を忘れてはなりません。

この言葉の背景

新島のこの言葉には、聖書にあるイエス・キリストのたとえ話と通じるものがあります。

ルカによる福音書 15 章 4 節に記されているイエスの言葉にはこうあります。

「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」

ここで語られているのは、迷子になったことが一匹の責任でも九十九匹の責任でもなく、「見失った」羊飼いの側にあるということです。そして、その羊飼いは、ただただ迷える一匹の羊を思いやる情熱と愛を持って捜し続けます。つまり、このたとえ話が示すのは、迷える一人の人間に対するイエスの深い愛です。一般的な考えでは「九十九匹いるのだから、一匹ぐらい」と思うかもしれません。しかし、羊飼いにあって、その一匹の価値は 99 倍です。ルカによる福音書 19 章 10 節「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」とある

ようにイエスは、小さく、弱く、迷える一匹を大切にし、命をかけても探す価値があると考えておられます。

この言葉を聞いて、「いやいや、そんな非合理的な話があるか？」と思うかもしれません。確かに、イエスの語る言葉は非合理的です。九十九匹の側にいるときには、何も響かないかもしれません。しかし、自分が「一匹」の立場に置かれたとき、その羊飼いの眼差しが、神の愛が、自分に注がれていることに気づくのかもしれません。

これこそが、聖書が語る良い知らせ、すなわち福音です。そして、新島襄とその後継者たちが受け継いできた「同志社スピリット」の一端でもあります。

この眼差しがあなたに注がれていることを覚えながら、今度はあなた自身がその視線を、他者や世界へと向けていくことを願っています。